



夏海まなつ・キュアサマー

悪堕ちウミウシ怪人戦闘員化

Ds

「波の音…
気持ちいい〜」



「ア…」

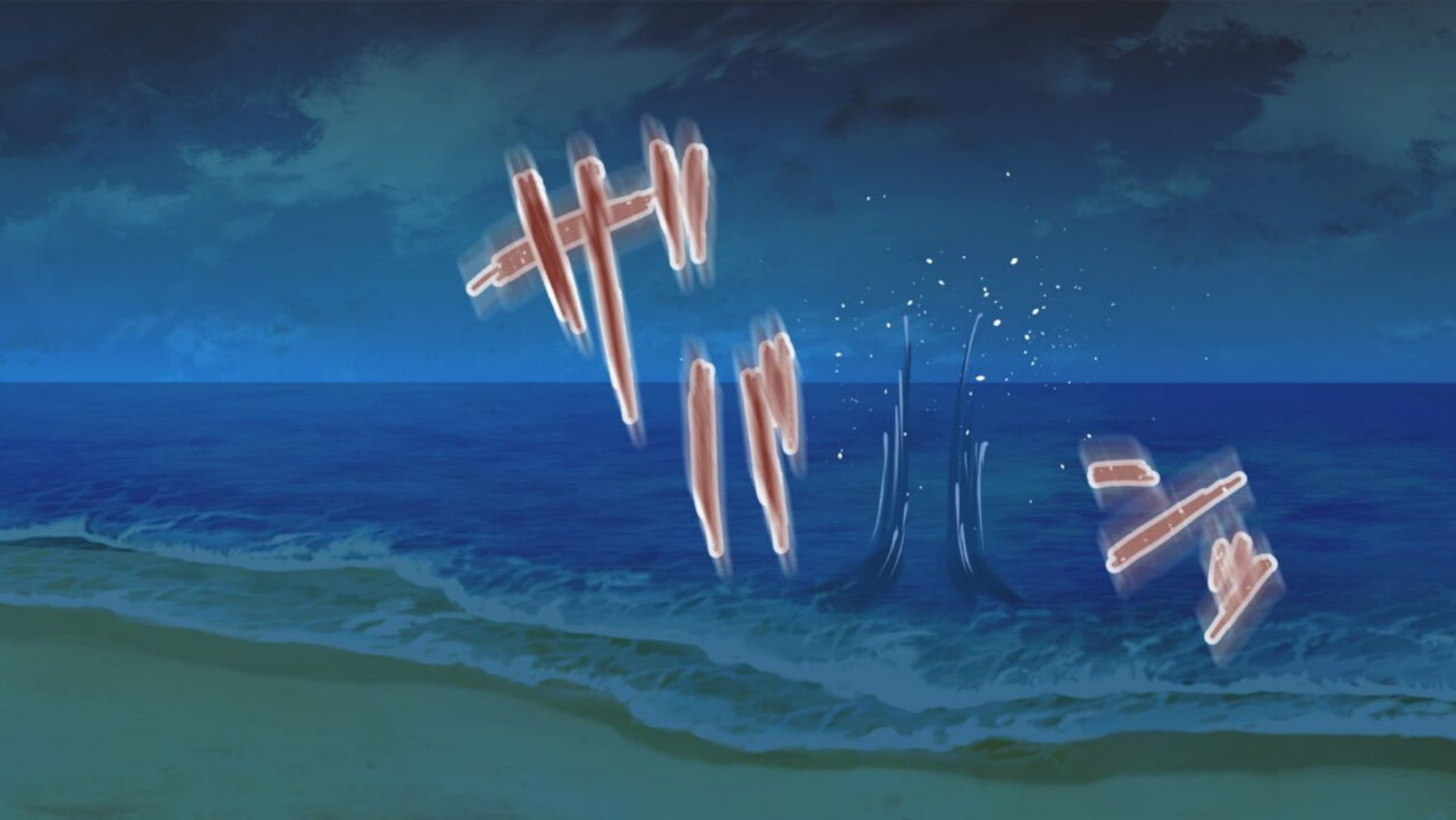
「」

「夜の砂浜を一人で散歩していると
南乃島のこと思い出すな〜」

(さんご、みのりん先輩、あすか先輩、ローラ…
あおぞら市に来て、みんなと出会えて…
こんなに毎日がトロピカって…)



(こんな日々がずっと続けばいいなあ)





「ooooo」



「え!?海から…何っ!?」

「…フシヨー…
ニジが、地上か」



「喋ったけその身体…
もしかして新しいヤラネーダ!?」

「ヤラネーダ…？
なんだそれは…
そこのお前は、ヒト、か」



「うんー私は夏海まなつ！
あなた…は、
ヤラネーダじゃないなら何なの？」



「私か…？？私は…」

「深海秘密結社・ディープシー幹部…」



「カイギユウ」

「深海秘密結社?」

ディープシー?

なにそれ!カッコいい!

トロピカってる!」

「なるほど、
海の生物を捕らえ、
自由を奪い、
見せ物として売っている、ワケ、か」



「そんな言い方しないでよ!」



「なになに!!
なんの話をしているの?!!」



「だが、事実だろう。
やはりヒトは、愚かで高慢、
この星を支配するのだ、相応しくなら」

「元はと言えば、
この惑星は我ら海の生物のもの、
だった、のにな…
お前らヒトが台頭してきて、
地上を繁栄させ、
この惑星はダメになってしまった」



「そんなことない！みんなトロボリカで、
全然ダメになんてなってないよ！」



「…そんなの、
私知らないッ…」



「戦争を続け、環境を破壊し、
他の生物を奴隷のように扱うヒトがダメじゃないんだよ。」

「お前が知らなくても、
ヒトはそういうもの、なのだ」



「…あなたはとうして地上に來たの…?」



「この星を、
在るべき姿に戻す…
そのためだ…」

「それってどうするの…?」

「簡単な話だ、地上のヒトを皆殺しにして、
我らディープシーの新人類がこの星を支配する」



「……みな……いんじ……ん」

ズ
ズ
ズ

ズ



ズ
ズ
ズ

ズ

(おぞましい…………ツ
ヤラネーダとは比べものにならないほど邪悪な気……！
こいつを放っておいたら絶対に駄目ツ！
ここで止めないでツ……！)



「カイギユウあなたは、
ここで止めるっ!!」

ハァ

プリキュア！
トロピカルチェンジ！

アア

「ほう、伝説の戦士プリキュア、か。
深海でもウワサで聞いたこと、あるぞ」



「我らの地上侵略の障害になると、思っていたが、
上陸していきなり対面するとは、な」

「ときめく常夏！
キュアサマー!!」



「皆殺しなんて絶対にさせない！
カイキュウーあなたは絶対にここで止める!!」



「…プリキュアは複数人いると、
聞いていたが…?」

「今は私一人なの！
でも負けないよ！」



「ほう、仲間はいないのか…
それはラッキー…だな」



「ラッキー…？」

プリキュアの二人を、
こちらの戦力に加えてしまえば、
残りのプリキュアも、狩りやすい。
侵略も殺戮もずいぶん楽になるだろう」



ㄉㄉ...

「…ツッ！」

私は絶対にあなたの
味方になんかならないから!!」

「…あれを早速使っ…」なるどはな



「これはディープシーの幹部二人につき
一つずつしか与えられなかったからな
対面したプリキニアが一人で、良かった」



ブーくっ??

「…それでも私は負けないッ!
ここであなただを倒してみんなを守るんだっ!!」

「ウミウシの、（新）新人類だ」

「ウミウシ…」

「お母さんの水族館で見たことある！」



「水族館…」

「うん」

「いっぱい海の生き物たちが見れるところなのー！
イルカさんもクジラさんも！」



(カイキユウ…こいつ…強い…
これまで戦ったどのヤラネータよりも…)



「ほう、一人でも中々やるじゃないか、
これがプリキュアか」



「だが、深海王様に因子^①を与えていただいた
新人類の私のほうが、1対1では勝るよう、だな」



「……!!
まだまだあつ!」

（全力！全開！！
これまでで一番ありったけの力を込めて！！）



「フリキニター！
おてんとサマー・ストライク！！」

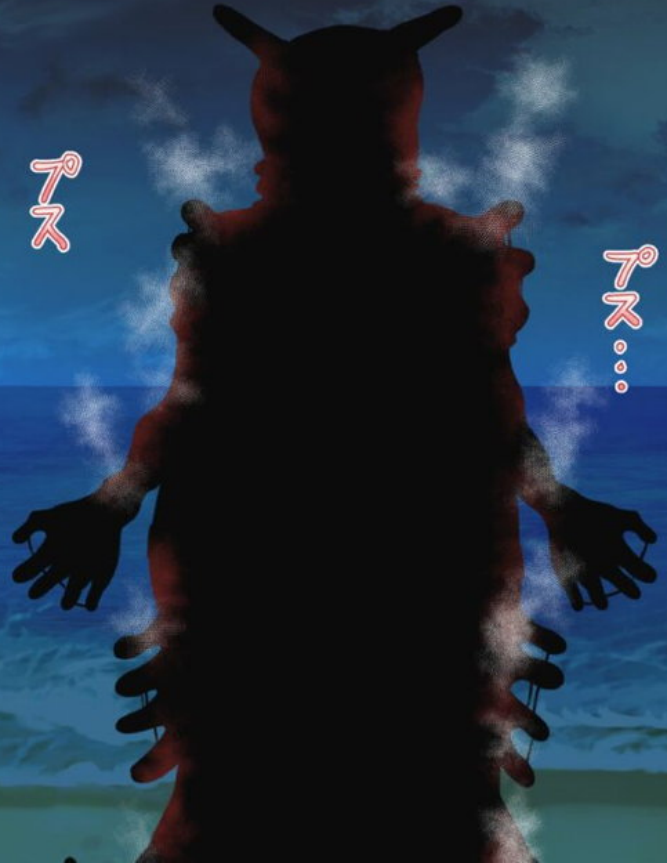
「ニャーニャーニャー」



「はあはあ……やった……?」



プス



プス……

「なっ！無傷!？」



「ふむ、たいした威力だ」

「深海王様に与えられし、この新人類の身体は、
お前ら、ただのヒトとは、造りが違うのだ。
だが、それでも中々効いたぞ。さすがはプリキュア、だ」



「...」

(そんな...ヤラネーダとは違う...
強すぎる...こんな勝てるわけ...)



「お、変身が解けたぞう…なんだ、もう終わりがか？」

「あれ…なんで…っ!?」



「どうやら、心が折れると
変身を維持できない、ようだな…」

「みんな…助けて…さんご…ローラあ…」

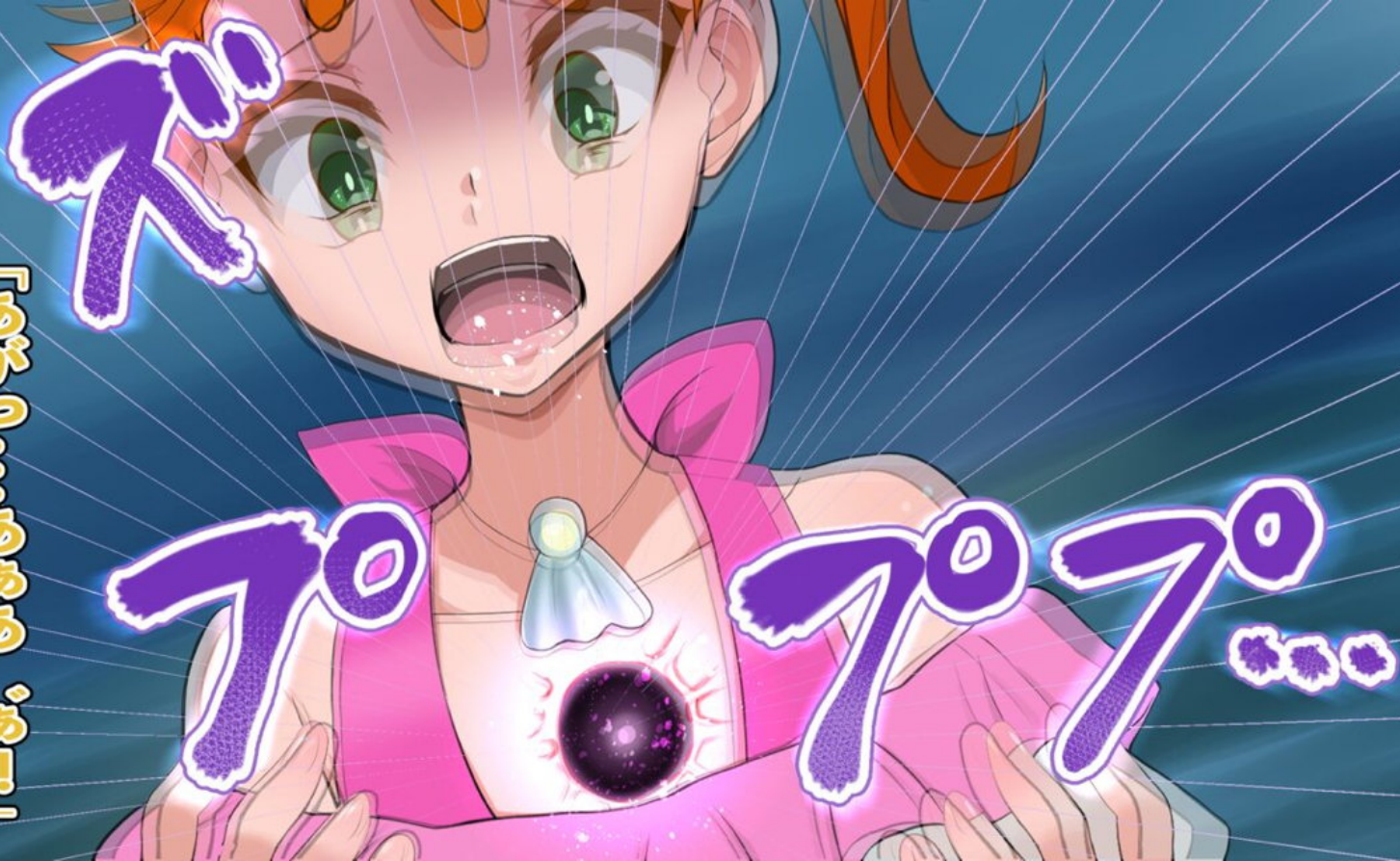
「変身が解けると、ただのヒト、か。楽でいい」

「おおお」



「それでは、これを与えてやるっ」

「あがつ……あああ、あ!!」



「深海王様の因子を、与えられた者は
肉体が変容し、深海王様のものに近くなる。
そして、精神も作り変えられる。
深海王様を絶対の君主として、崇め、
生涯の忠誠を、誓うように、な」



「ピトに与えると、肉体の方が
どうなるかは、未知だが……どれ、実験だ」

「あああああ!!
お母さん……あすか先輩……
みのりん先輩……さんご……
ローラアあ……」



「ほう、体内に直接因子が入り込んで尚、抵抗するか、
さすがプリキュアになったヒト、というべきか……」

「たとえ勝てなくても…
私は負け…ないっ!」

フー

フーッ

フーッ

フー

「たしか、ヒトというのは、性的快感に精神が
流されやすい生き物だったか…どれ…」

「あっ、やめっ…
脱がさないでっツ!!」

「ああっ！なにっ!？」

「ほう、これがヒトのメス生殖器か。
これは雌雄同体の、私にも惹かれるものがあるな…。」



「やめっ……やめてよっ!!
そこは触っちゃだめっ!!」

「ん？なんだ濡れてきたぞ、滑りがよく粘りがある…
まるで、私の体液だな…ヒドからも、こんな液体が分泌されるのか…」

ちっ…

ぬち…

「んっ、やっ!だめっ、そこ触っちゃああ…」

「そっか、生殖しやすいようだ…
ニスを挿入し易いようだ、これが分泌されるのが、面白い」

「だめえ…」

「どれ、ヒトの生殖行為の、
真似事でも、してみるか」

「な、なにそれっ……」

「ペニス。生殖器だ。」

「とはいっても、ヒトであるお前と、
新人類の私の間では、
生殖することは、できないのだが」



(((今はまだ、な)))

「さっさと前の「エド」の身体は、終わるんだ。
最後に、「エド」の身体は、セックスを、保ちたいわんさうさ...」



「ちょ、ちょっと！やめてっ！！
何かわかんないけど絶対だめっ！！」



「7%...」



ズキキキキ

ギョッ!?

「ほう、これがヒトの、メスの生殖器…
非常に温い。そしてうっわうわと蠢いているな…」

「いっぎゅっ…
なにこれえっ…
いたいっ…痛いッ!!」





「あ、あれ……？私の身体何かおかしく……」

「因子^①の定着が進んだか、
身体が新人類へ、近づいてきたぞ。
精神の方は、まだまだのようだが」



「あなたに近付く…?!いや…
イヤイヤイヤッ!!
私、化け物になんてなりたくない!!
人間がいいっ!!人間でいたいよおっ!!」

ぐぐ…
|||||

「なに、嫌悪するのは、今だけだ。

じきに、因子^①がお前の精神に、作用し始める」

「そうなれば、ヒトであることを恥たどすら、感じ始めるだろう。

そして、自ら新人類へ進化したいと、願い始めるはずだ」



おほおほ

おちぢい

どろろ

どろろ

「ほう、奥にいけばいくほど、
絞まりもキツくなる、な
温さも上がっている…」

パン

パン

きゅうらっ

ほ

ほ

パン

パン

「どうだ、私のペニスのヒタと、
お前の生殖器のヒタが
擦れ合って、気持ちいい、だるう？
人間同士では、決して味わえない
感覚だ、よく味わうといい」

「キュアサマー、夏海まなつ…
お前はヒトでありながら、選ばれたのだ…
新人類へと、生まれ変わることができるとだ、
分かっているか？特別なことだ、
光栄なこと、だろう？」

やっか

ぬっち

さかん
さかん

ぬっち

ぬいっしょ

「早く、私に身を任せるといい。
深海王様に絶対の忠誠を誓い、
我々と同じく新人類となり、
ディープシーの、二員として
共にこの星を在るべき姿に戻すのだ」

「いやッ…私まだ、
やりたいこと…
全然やれてないのだから!!」

「深海王様に仕え、
ディーブシーの戦闘員として、地上を侵略し、
ヒト共を皆殺しにするんだけど、
お前の、これからの、やりたいことだ」

「絶対…絶対絶対絶対にイヤッ!!
そんなのトロピカらないッ!
最悪だよおっ!!お願いもうやめてえ!!」

「その割には、先ほどから、
発情が止まらないように見えるが、な」

「へ…?」

ピタ…

「追い込まれ、
ピトとしての、終わりの淵に立たされ、
より性的興奮を催すとは、
お前、マンというやつか?」

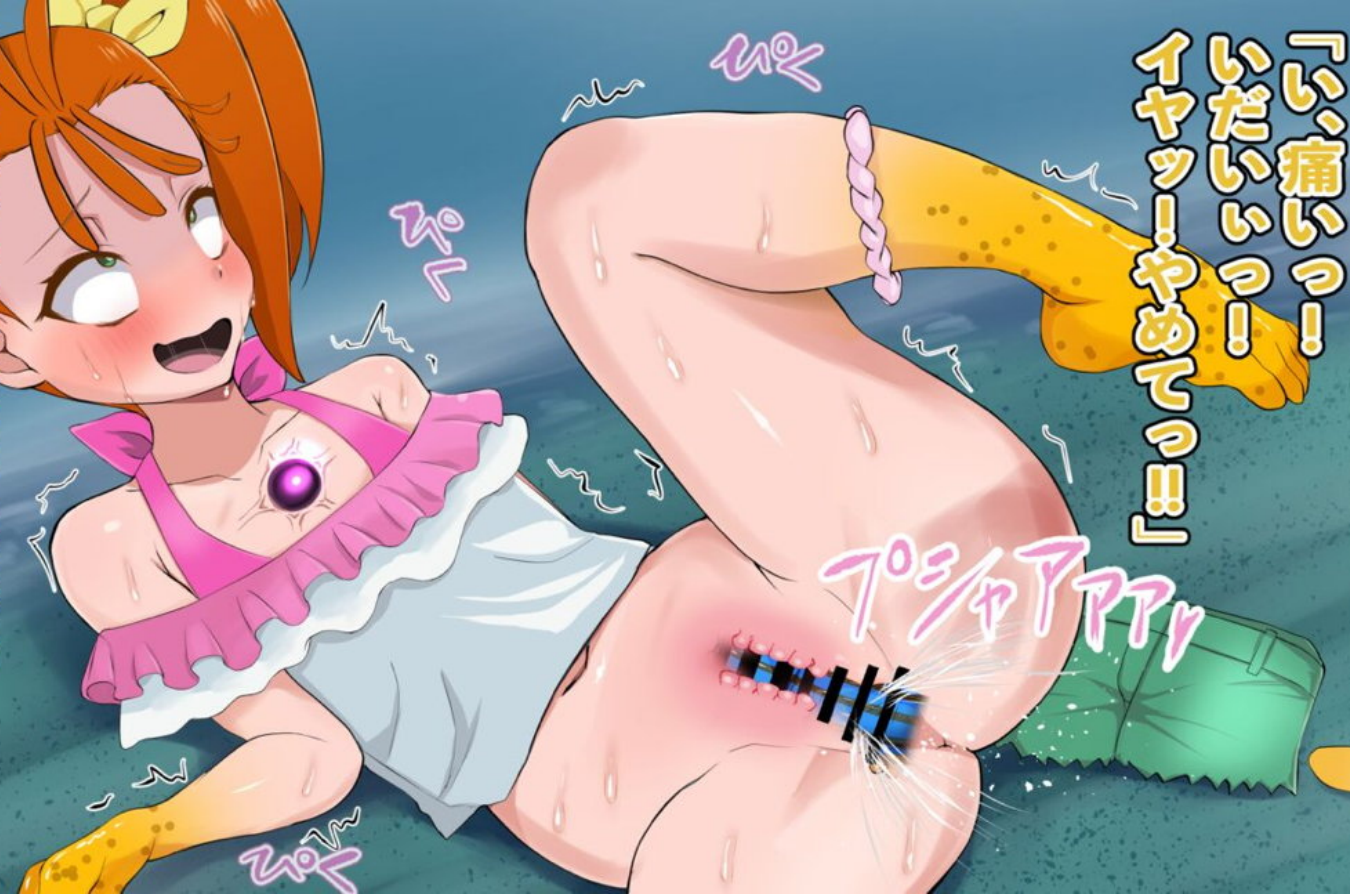
「マ…ソ…なにそれっ、わかんないっ」

「自分の、性的嗜好を、自覚できたらならぬのが、お前はそれほど、幼い」とどららどらどが…」





「やると言いつつ、お前の口元は緩み、
目は濁り、顔は上気して、見るように見えるが、な」



「い、痛いっ！
いだいいっ！
イヤッーやめてっ！！」

ゴッパッパッ

「ドトとしての最後に、自分の性的嗜好を
知ることができてよかったじゃないか」

（なんで……？）

痛いのに……

怖いの……

気持ち悪いのに……

嫌じゃ、ない……

トロピカってるぅぅ？！



「ほう、絶頂オシロイというやつか、すごい痙攣だ、
膣内の蠢きも、活発になっている」

ガク

さやうらんっ
うわっ♡♡♡
うわっ♡♡♡

ガク

「あ…へえ…
トロピカ…ってるら…?
なんれえ…」



「私も、射精^だしておこう。
受精しないとはいえ、それが
交尾の様式美、だからな」

ドピュルル

「あつたかあい…♡
なんか…ポカポカすりゆう…♡」

ルルルルルル



（もう一押し、だな…）

「まずは服を、脱がせる、か。
新人類に衣服は不要、だからな…」





あつ...
おっし...
さわち...

さつ...

びく...
ぐわ

びく...

ぐわ

びく

(あれ…手と足がの感覚が…変…)

(指先が広がっていくような…
地面の砂粒の数まで分かるような…)

ドクン…

ツリ

ツリ

ドクン…

ハッ

ハッ

(こんなの…絶対おかしいよお…)





ゲウツ

オホッ

「ほぅ、乳首…
すごい勃起だ、まるでウツクウツク、
私のようにではないか」

ホッ

ホッ

ホッ

「あ…ちゅめえ…ちゅびら…
おさないでえ…んりんりんちゅやあ…」

「覚えておけ、

ウミウミは毒を持っているのだ」



「毒...毒っ!?
私死ぬのおっ!?」



「何今お前に使っているのは、軽微な神経毒。致死性のあるものではなう…」

「はあはあ…でも…んっ！
なんでえ、こんなニ身体が熱い…のお…
心臓の音もすんげえなう…」

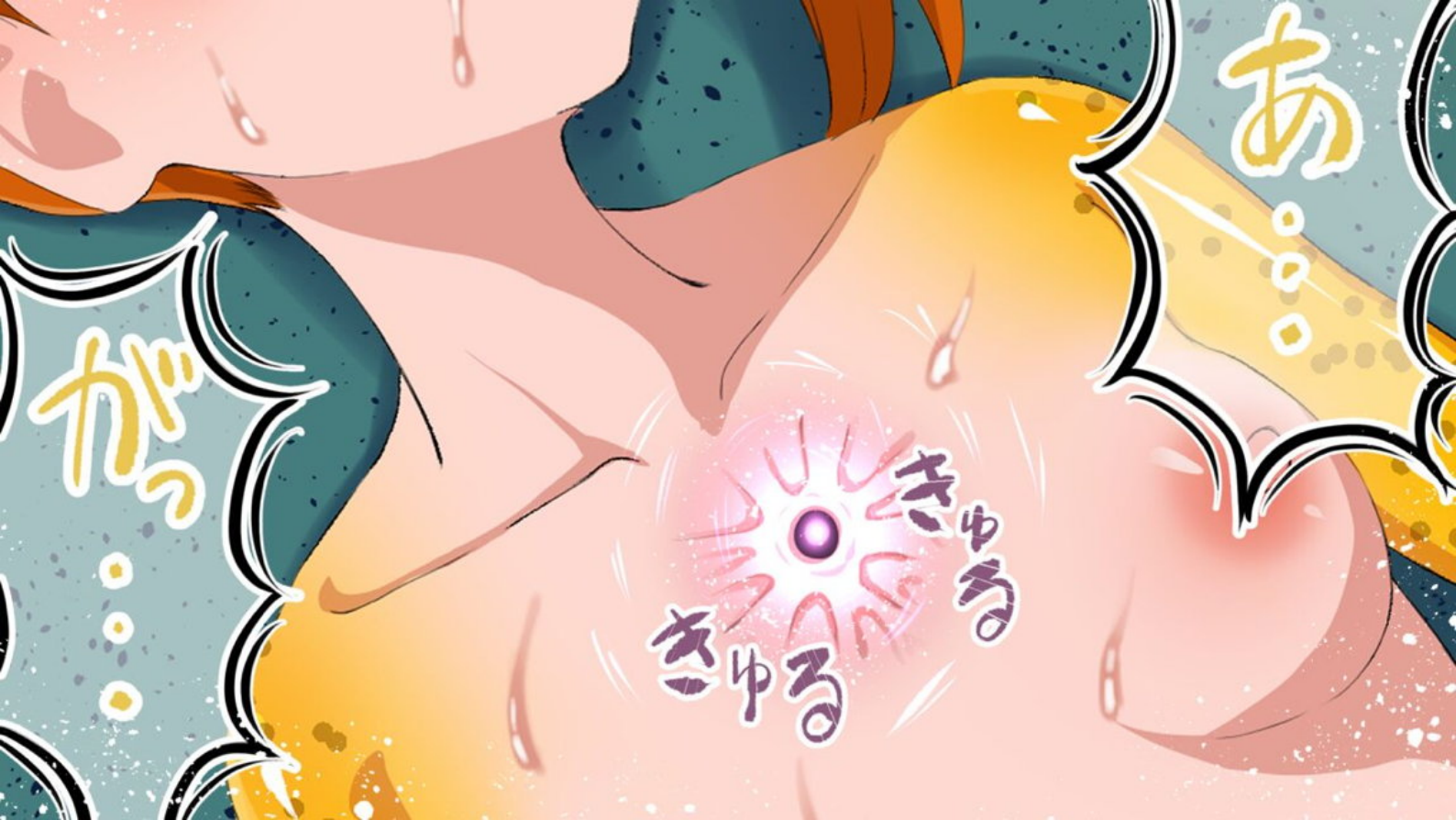
「それこそが私の、神経毒の效能だ。
今、お前の身体は「撫でず、
全身の毛が逆立つほど敏感になっている。
全身の感度を上げる毒…媚毒…どらうべきか」

「わかんない…
なに言ってるのかわかんない…
けど、からだかポカポカして…
トロピカってる…かも…」



頭がグルグルして…何も考えられなくて…(…)





あ

が

さゆる



と

ぱん



「因子ごと、身体が融合したか…!」

ドクン

ドクン

ドクン

ドクン

「~~~~っっっ!!」

「もう、そろそろ、か」

「うぎぎぎぎぎっー頭がっ、をだっ、割れそっマ…!!」

「あとは、精神が「因子」と融合すれば、身体の方も、完全なる、新人類へと、進化できるだろう」







「あなた…私に何かしたんでしょうおっ!!
だってこんな…おかしい…っ」



「因子が全身に定着し始めたか」

（なに、あれ…ツッ！
ヤラネーダの球…!?
いや、そんなものじゃない!!
禍々しさが段違い…!!）

「我らを新人類にしてくださった、
深海王様がくださった『因子』の塊だ。
私は海を泳ぐ一介のウミウシだったが、
深海王様にこれを与えられ、新人類へ進化できた。
これをヒトに与えたら、どうなるか…。」



「……………」

「……………ど…ど…ど…何もなし…
私たしか砂浜でカイギュウだ……………」

ハズ…

「キミんかブー…夏海さんか…」



「誰…?」

「誰の声なの…?」

「…は…前の精神世界…」

「精神世界…?」

「心の中って…?」

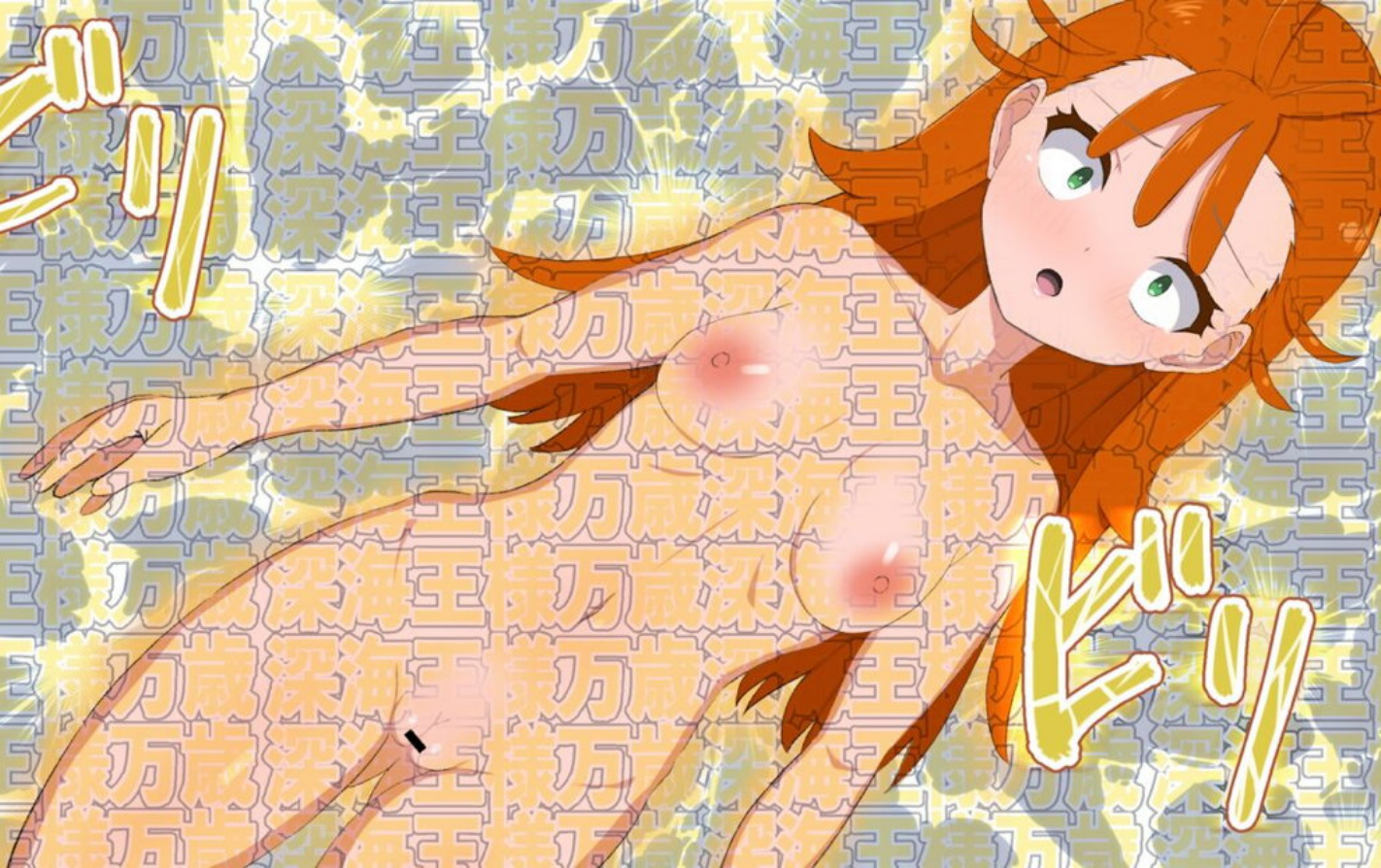
「そうだ。」

「そして我がだれかは本能で
理解できていゝるはずだ」

「…え?」

「いや、私あなたの声聞くの初めて…」

ビビッ



ビビッ

「キムササマー、夏海まなび…
お前は私のシセベとなり、
地上にはびこるヒト共を皆殺しにするのだ…
それこそがお前の使命であり天命…
我が与えるお前の生きる意味…」

トクン…

「わたし…の、生きる意味…」

だめよ

「まなつ！」

どっちにいったらだめ！

「まなつ！」

もどいていきな！

「まなつ！」

なにやっでんのよー！

「まなつ！」

こんなまなつらしくないよー

「まなつ！」

A close-up illustration of a woman's face. She has brown hair and purple eyes. On her forehead, there is a large, glowing pink orb with a small white circle in the center. The text is written vertically in the center of the image.

前。の。私。の。名。前。を。...



「本格的な肉体の変化が
始まったか……
精神世界で、
深海王様の因子に
触れた、ようだな……」

ドクン

ドクン

「伝説の戦士ブリキユア……
その二人を、いきなりデイーブシーに
引き込めるとは、な。」

これはかなり、こちらの戦力増強に繋がったぞ。
上陸早々幸運だ」

ドクン



「フプリキュア！
トロピカルチェンジ！」





「そろそろ、か…」

キイイ

イイイ

「さあ目覚めろ、新しい同胞よ」

「……」

「ちゃんと生まれ変わったようだな、
それではこのベルトを、巻け。
ディープシーの構成員である、証だ」

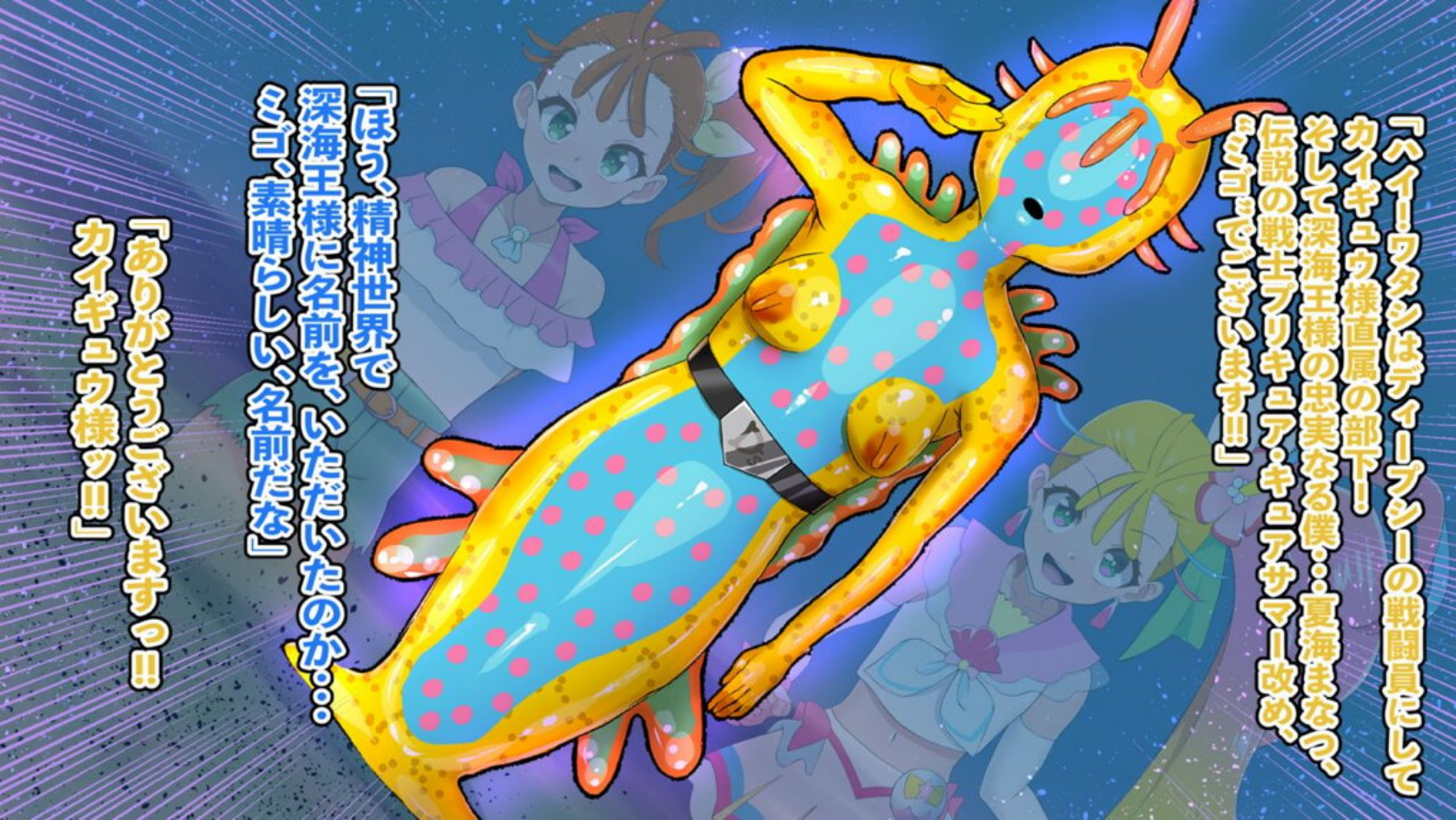
「……ヘツ」

九千

九千



「うまく、巻けたようだな。
それでは聞こう、
お前はなんだ？」



「ハイパーワタシはディープシーの戦闘員にして
カイギニュー様直属の部下！
そして深海王様の忠実なる僕…夏海まなつ、
伝説の戦士フリキュア・キュアサマー改め、
ミコでございます!!!」

「ほう、精神世界で
深海王様に名前を、いただいたのか…
ミコ、素晴らしい、名前だな」

「ありがとうございますっ!!!
カイギニュー様ッ!!!」

「…トとして、の、権利も、尊厳も、戸籍も、生活も、精神も、身体も、全て、捨てたんだな？」



「ハイ、夏海まなつとしてのワタシはもう存在いたしません。人間時代の親も友人も学校の者ともも全て深海王様、カイギニュー様のご命令とあれば全て差し出します。…なんなりと」

「それにしても、ずいぶん私に近い形の、新人類に成ったな」



「ワタシは深海王様の「因子」を、カイギニュー様から与えられたので、それも少なからず影響したのかと」

「くくなるほど。」

私の直属の部下として、はなちゃんをやらせよう



「ワタシもカイキュウ様の
直属の部下として、
近しい身体をいただけで…
大変光栄でございます…」



「では、先にも上陸してらる

私の他のティーンズー幹部と合流するぞ」

「ハッ!!」

「そして、お前の他のプリキニアも、
全て、ディープシーの手駒だ、してんねえよ」



「ああそれは、
なんと素晴らしい…
待ち遠しいわねえわ…」



「まあ、ではディープシーの
新たな戦闘員となった、マキよ、
忠誠の、口上を唱えるがらう」

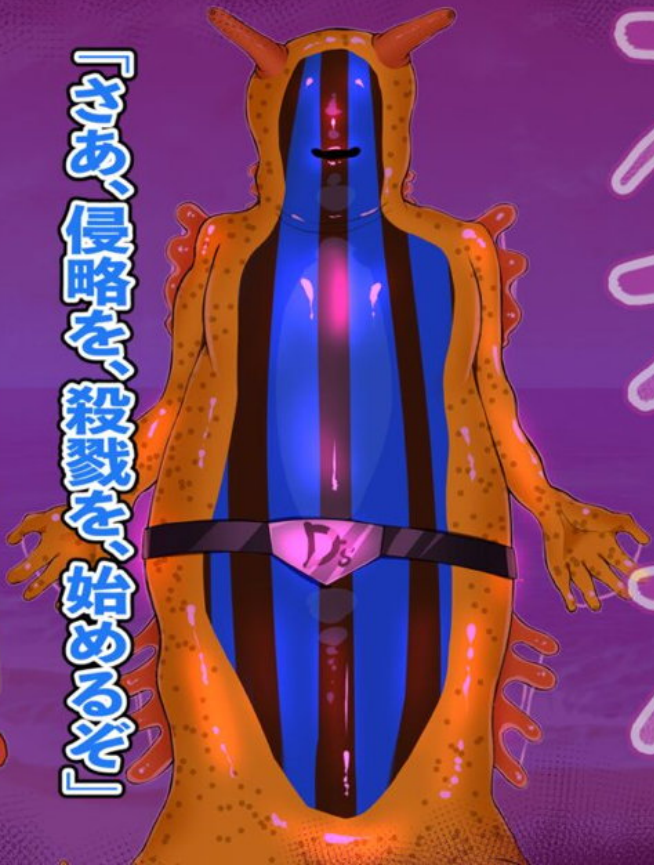
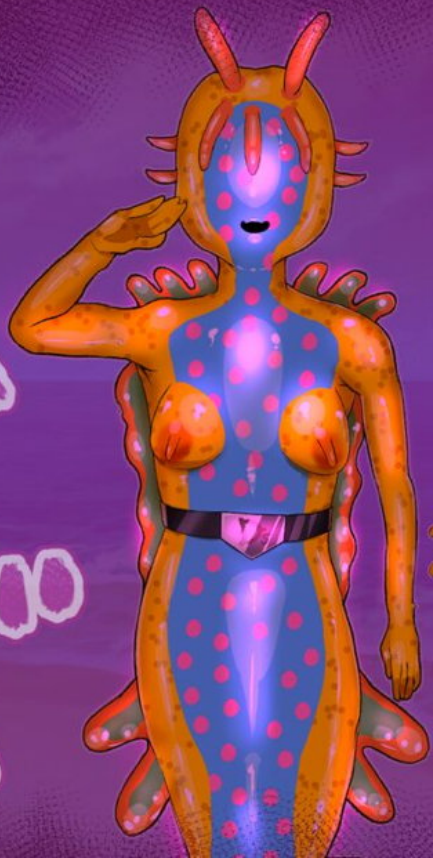
「全てはカイギニュー様のために！
ディープシーのために！
そして深海王様のためにいいッツ!!」

バツ

「愚かな人類は皆殺しイッツ!!
地上を浄化し、この星を
在るべき姿にいいッツ!!」



「さあ、侵略を、殺戮を、始めるぞ」



「深…海王…様…?」

「おっぴろぎ」

（あれ、私どうしてこのお方の
名前がわかったんだらう…）



「おん、おん、おん」

人類は……地上の「下」共は増えすぎた……

そして海をよびこみ、地球をたもとに競争しはじめた……いっしょにいっしょに

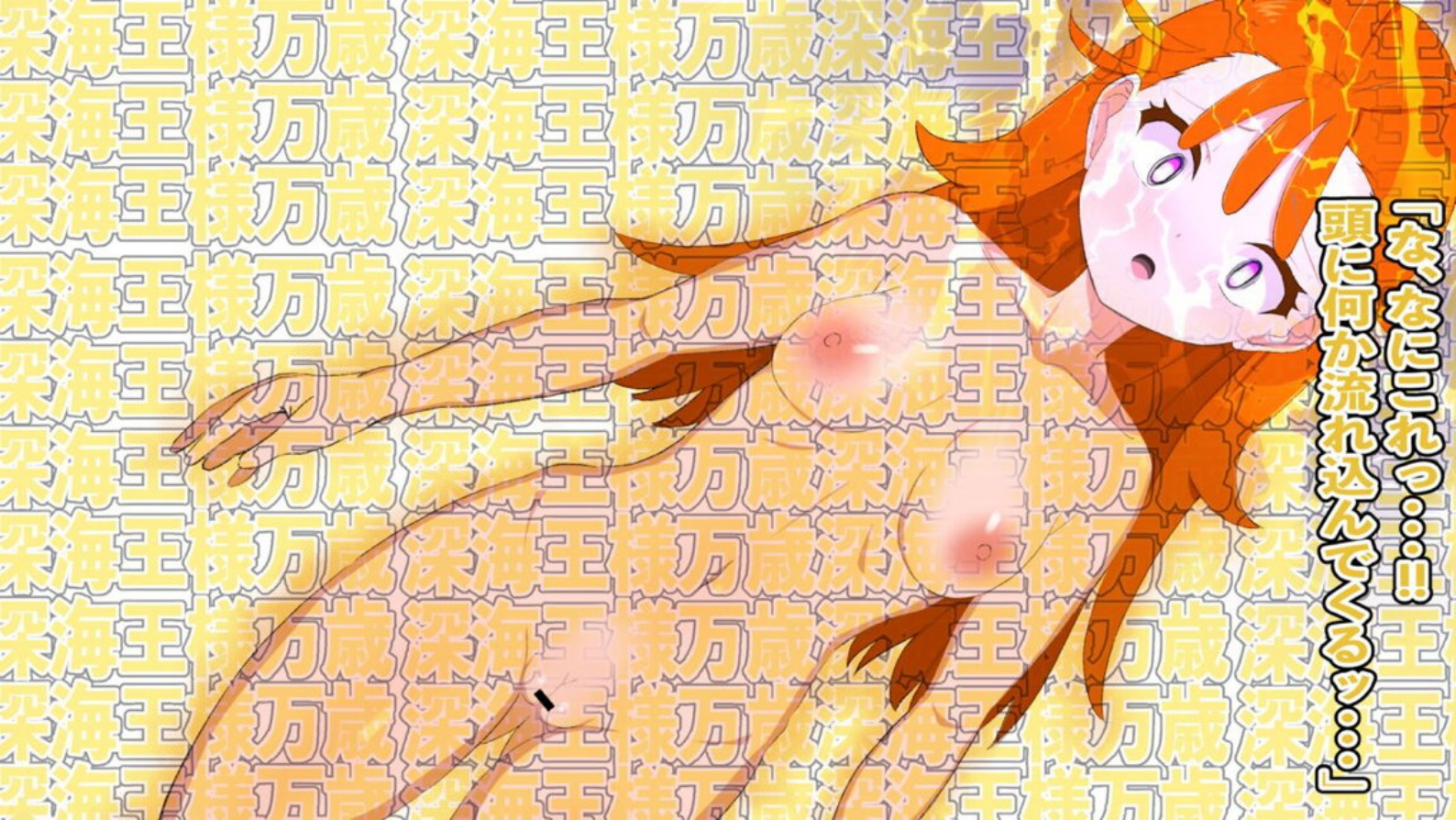
「どう……だるう……」

私バカだから……

わからない……」

「そうか……まだ精神に我の『因子』が
完全になじんでいないか……」

「えっ？」



「な、なにこれっ…!!! 王王王
頭に何か流れ込んでくるッ…!」

パチ

パチ

パチ



Repeating background text: 深海王様万歳 (Seikai no Ou-sama Manzai)

「……もう一度聞かせて。
おちかなとト共を許せるかなとおぼしめしよ」

はあ

はあ

はあ

はあ

「……」

ズズ...

「人類…ヒト…許せ、ない…」



「…ハッーち、違っつー私そんなこと…」

「違おない」

「あ、あれ…?」

…そう…だよね?

うん、私は間違ってない…

深海王様が仰るのなら…」



「私の名を呼んでみる…」

「深海王…様…」

「深海王様パンゼイト、
言ってみろ」

「深海王様…万歳…」



「夏海ちゃんよ…」

「トトとしての身体・精神に未練はあるかも。」

「…ありません。私は深海王様の僕…」

「トトのままでは真の僕にはなれないので…」

「はい、どなたにもおんがう。」

「新人類に…新人類になりたいです…
私を新人類にしてください…
どうか、どうか…」



「このままじゃだめだ。どうしてこんな状態なんだ。……
お前の名前は何だ。名前を呼んでみるよ。」



「くま!! あらなさん!! かわらぬわー!!」

「ムゴ…私は…ムゴ…ムゴ…ムゴ…」



「ああ、なんと素敵な名前…」

「深海王様に命名していただけるなんて…」



（みんなが呼んでる…
声が聞こえる…）



「待っててね、みんなもすぐに私と同じ
深海王様の僕にしてあげるから…♡」

「完全に我の『因子』が
定着したようだな、ミジよ」

「ハッーまだ精神世界の精神体は
ヒトの姿ですが…」

もうじき現実世界の私の身体が
完全なる新人類として完成します。
そうすれば精神体の方もリンクして
新人類としてのもとなるでしょう」

「精神体はその者の本質の姿を
表すものだからな…」

精神体が新人類の姿になるということは
お前はもう二度とヒトにもどることはない。
生物としての本質の形が根本的に変わるからな」

「そうなれば我の永遠のシシセペ…手先となる
お前の『運命』が『確定』するわけだ。

先程までプリキユアとして
人類を守護する立場にあつたお前が
人類をほろぼす我の使者となることになり
どうだいどう思う？」

「大変喜ばしいことですね、さいますっ!!
この身をもつて深海王様への
忠誠を証明できるなんて…
さらにクソツタレのヒトの姿に
二度と戻らなくていいなんて…
最高ですよ…♡」

はっ

はっ

はっ♡

はっ

「人間時代は間違った正義を植え付けられ
ブリキユアとして、ヒト共を守ってやりましたが
新人類となったらせゝんぶ殺しますっ!!!
それがこの地球を浄化する一番の近道ですから」

「いい心構えだ、もう精神の方も
完全に新人類のものと言えよう」

「あっ、そうだ…
思ったのですが…」

「ん？」

「精神世界でプリキニアに変身して、
その精神体のまま新人類に成れば、
プリキニアとしての力を
少しでも多く引き継げるのではないかと」

「なるほど、確かにそうだが
戦す価値があるのか、
やってみようか」

「ハッ!!」

「ときめく常夏！
キュアサマー!!」





「変身早々申し訳ございません、
そろそろ現実世界の方で
私の新人類化が完了しそう…です」

「そうか、目が覚めようなんだな。
よし、目覚めてっけ。
新人類として、我のシヤムとっけ
新たな人生をスタートさせてみるのだ」

「ハッ!!」

「深海王様万歳ッ!!」